

仙台市文化財調査報告書第228集

仙台平野の遺跡群XVII

— 平成 9 年度発掘調査報告書 —
燕沢 遺跡 第 11 次 調査

1998年3月

仙台市教育委員会

仙台平野の遺跡群XVII

— 平成 9 年度発掘調査報告書 —
燕沢 遺跡 第 11 次 調査

1998年3月

仙台市教育委員会

序 文

国庫補助事業として「仙台平野の遺跡群」発掘調査に着手したのは昭和56年度でした。この事業も数えて17年目を迎え、これまで陸奥国分寺跡、国分尼寺跡の国指定史跡の範囲確認調査や郡山遺跡、富沢遺跡などの個人住宅建築に伴う小規模調査を行ってまいりました。今年度は、燕沢遺跡の範囲の確認調査ならびに性格究明のための発掘調査を実施しました。

当市は平成元年4月に政令指定都市となり、都市整備の充実が急務となってきております。こうした中で、道路整備に関わる総合交通体系の整備事業や区画整理事業を基盤とした町づくりが進められています。一方、民間の小規模開発も増加し、発掘調査件数も漸次増加する傾向にあります。

当市教育委員会では、先人の創造した歴史と文化遺産を次の世代に継承し、生活の中での活用を図っていかなければならない責務を負っています。しかし、こうした文化財の保護活用は、市民の方々の御支援があってこそ、はじめて成果をあげられるものと思います。

今後とも広い視野にたって充実した遺跡保護を行っていくために、精一杯努力してまいる所存でありますので、さらなる御指導、御支援を切にお願い申し上げ、刊行のご挨拶と致します。

平成10年3月

仙台市教育委員会

教育長 堀 龍 克 彦

例 言

1. 本書は平成9年度国庫補助事業である緊急遺跡範囲確認事業に伴う「仙台平野の遺跡群」の発掘調査報告書である。
2. 本書の土色については「新版標準土色帖」(小山・竹原:1997)を使用した。
3. 実測図中の水糸高は標高である。
4. 実測図、本文中の方位は真北を基準としてある。仙台においては、磁北は真北に対して西偏約7°20'である。
5. 本文執筆は、長島栄一 I、豊村幸宏 II[1]1、2、3が行い、編集は長島・豊村がこれにあたった。
6. 遺構略号は次の通りとした。

S A 柱列 S B 建物跡 S D 溝跡・溝状遺構
S I 住居跡・窪穴遺構 S K 土坑 S X 性格不明遺構

7. 本書中に掲載した発掘調査で出土した遺物及び遺構・遺物の実測図は、全て仙台市教育委員会が保管している。
8. 今年度事業は平成9年9月に着手し、平成10年3月に終了した。

目 次

序文

例言

I 調査計画と実績.....	1
II 発掘調査報告	
[1] 燕沢遺跡－第11次調査－	
1. 調査経過.....	2
2. 発見遺構と出土遺物.....	3
3.まとめ.....	19
写真図版.....	25

I 調査計画と実績

仙台市は昭和62年に宮城町、昭和63年に泉市、秋保町と合併し、明治22年の市制施行以来100周年にあたる平成元年に、全国11番目の政令指定都市に移行した。さらに市営地下鉄の開業や延長、仙台空港の国際化、高速道路網の充実によって著しい都市化が進む状況になってきている。旧仙台市域では辛うじて残っていた農地も急速に宅地になり、緑ゆたかであった郊外の丘陵地も開発の予定が表明される時世となっている。

仙台市内の遺跡－埋蔵文化財包蔵他－は約700箇所に達するが、日々変化する社会の中で現状のまま将来に残し、伝えていくのはきわめて困難である。このような中で開発に対応した発掘調査だけではなく、事前に遺跡の範囲と性格究明を目的とした発掘調査を実施して行くことが、今後の遺跡保護に重要と考えられる。また遺跡内での個人住宅や木造の共同住宅建築のような小規模開発に伴う発掘調査も必要に応じ実施していくことが、遺跡の範囲確認や遺構の在り方を検討するうえでも有用と考えられる。それらを目的として当市教育委員会では昭和56年度より国の補助を受け、「仙台平野の遺跡群」の発掘調査を実施してきた。これまで郡山遺跡をはじめ、陸奥国分寺跡、陸奥国分尼寺跡、仙台城巽門跡、大年寺懸門、長町駅東遺跡（長町貨物ヤード跡地）で発掘調査を実施し、大きな成果をあげている。

今年度は燕沢遺跡で発掘調査を実施した。燕沢遺跡は平成5年度から継続的に調査し、今年度で5年次目になる。昨年の第10次調査では平安時代の寺院の区画と考えられる坪跡を発見した。今年度はその北東に隣接した地区で、坪跡の延長部を発見する目的で調査を実施した。

1. 目的 仙台平野に分布する遺跡群の範囲、性格究明のための発掘調査

2. 調査面積 400m²

3. 調査期間 平成9年10月～12月

4. 調査体制

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 仙台市教育委員会文化財課

課長 佐藤 審…

調査第一係 係長 田中 則和 主査 木村 浩二 主事 長島 荣一

文化財教諭 豊村 幸宏 托託 森 剛男

調査第二係 係長 結城 慎一 主査 篠原 信彦

管理係 係長 今井 京子 主事 高橋 博史 主事 佐藤 直美

調査地	所在地	申請者	調査事由	対象面積	調査面積	調査期間
燕沢遺跡	宮城野区燕沢東 三丁目185地	仙台市教育委員会 教育長 堀内克彦	範囲確認	400m ²	400m ²	平成9年10月13日 ～12月12日

調査実績表

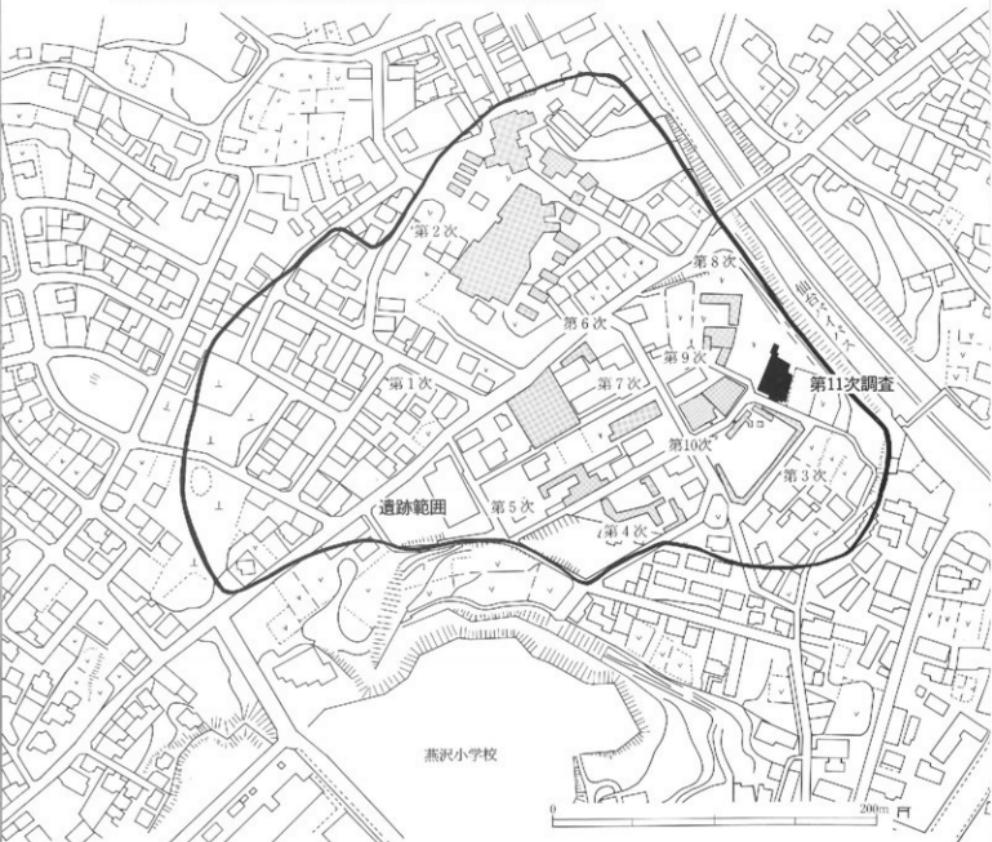
II 発掘調査報告

[1] 燕沢遺跡－第11次調査－

1. 調査経過

平成5年度の第7次調査より、遺跡内の最も標高の高い平坦地で発掘調査を実施している。今年度は、昨年度の第10次調査のII A区と道路を隔てた東側に調査区を設定して発掘調査を実施した。今回の調査区は平成7年度の第9次調査で検出したSB 3掘立柱建物跡の東側に寺院の中枢部を区画する遺構が存在するかどうかを明らかにする目的で設定した。

発掘調査は10月13日から実施したが、以前に調査区を含む周辺地域一帯が削平された可能性があり、遺構の遺存状況はよくなかった。遺構の概要が明らかとなった11月20日に周辺の住民を対象にした説明会を実施し、野外における発掘調査を終え器材等の撤収が完了したのは12月12日であった。



第1図 調査区位置図

2. 発見遺構と出土遺物

第11次調査で発見された遺構は、柱列2列、溝跡2条、竪穴住居跡2軒、土坑7基、性格不明遺構2基、小柱穴、ピットなどである。これらの遺構は、畑の耕作土(基本層位第I a～I c層)の直下の第II層で検出されている。遺構番号と遺物番号については第7次調査からの継続番号であり、第1次調査から第6次調査までは区別している。

SA10 柱列 調査区の西南部で東西方向に並ぶ2基の柱穴を検出した。柱痕跡は確認できなかったが、掘り方の形状や規模がほぼ同じであることから2基の柱穴よりなる柱列と推定した。検出した長さは掘り方の中心で約160cmほどで、ほぼ真東西方向である。柱穴の掘り方は一辺42～56cm×57～64cmの不整な方形で、柱穴の深さは遺構検出面より8～19cmである。掘り方の埋め土は、黒褐色シルトである。

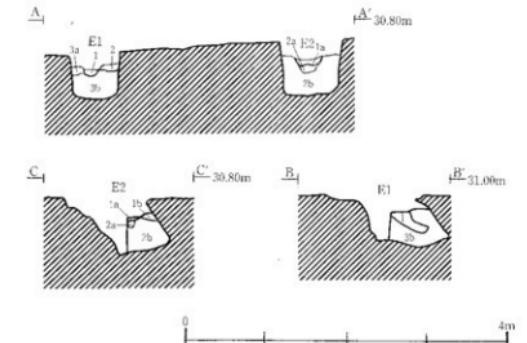
SD35 溝跡に切られている。

〔出土遺物〕 E 1 柱穴掘り方理め土より土器器環片、赤焼き土器環片が少量出土した。

SA11 柱列 調査区の西壁中央部で検出した東西方向に延びる柱列である。調査区内で2基の柱穴を確認したのみであるが、さらに西側に延びていく可能性もある。柱間寸法は273cm、方向はE→Sである。柱穴の掘り方が一辺60～73cm×92～108cmの隅丸長方形で、中段ではそれぞれ60cm×60cmの隅丸方形となる。又、柱穴南熙は両柱穴ともえぐられるように横方向に掘り込まれている。柱痕跡は25～33cmの円形もしくは梢円形である。柱穴の深さは、遺構検出面より54～67cmである。掘り方の埋め土は、黒褐色粘土及びシルト質粘土、灰黄褐色シルト質粘土、暗褐色粘土質シルトである。

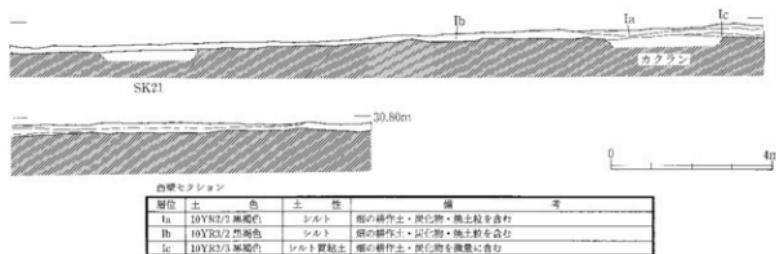
〔出土遺物〕 E 2 柱穴掘り方理め土より土器器環片、赤焼き土器環片が1点ずつ出土した。

SI10 竪穴住居跡 調査区の東南部で検出し、遺構の南半部は調査区外へ延びている。剖平のため周溝の一部と柱穴4基のみを検出した。平面形は方形で北辺6.2m以上、西辺4.3m以上である。方向は、西辺でN-6°-Wである。周溝は北辺部と西辺部を検出し、上幅15～25cm、下幅10～15cm、深さ5～12cmである。周溝内の堆積土は黒褐色シルトである。柱穴の掘り方は、一辺が40～66cm×40～55cmの隅丸方形で、柱痕跡は19～27cmの円形もしくは梢円形である。柱穴の深さは遺構検出面より19～42cmである。柱間寸法は4.2～4.3mである。掘り方の埋め土は、黒褐色シルト、暗褐色シルトである。

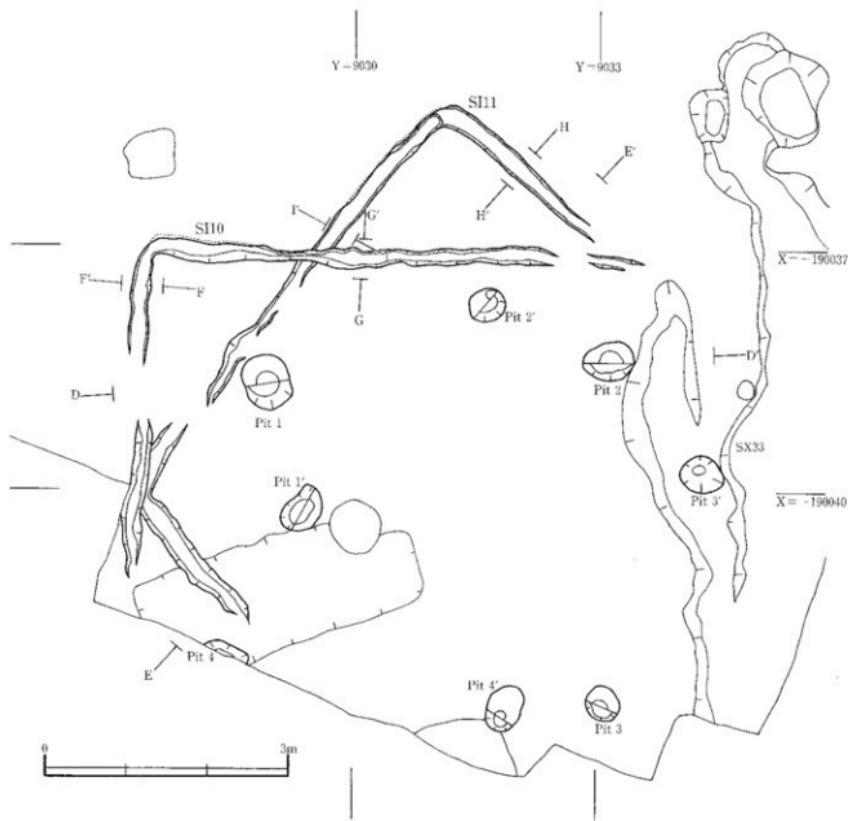


遺構名	層位	土色	土性	特徴	参考
E 1	1	10YR3/3 黒褐色	粘土	硬を含む	
	2	10YR5/2 灰黃褐色	粘土		
	3a	10YR4/2 黑褐色	粘土	小礫を含む	
	3b	10YR2/2 黑褐色	粘土	砂を含む	
E 2	1a	10YR3/4 黒褐色	粘土	小礫と貝壳物を少量含む	
	1b	7.5V2/3 黑褐色	粘土		
	2a	10Y3/3 黑褐色	粘土	小礫を含む	
	2b	10YR3/3 黑褐色	粘土	中礫を含む	

第2図 SA11 柱列断面図



第3図 調査区西壁断面図



第4図 SI10・SI11 壁穴住居跡平面図 (1/60)

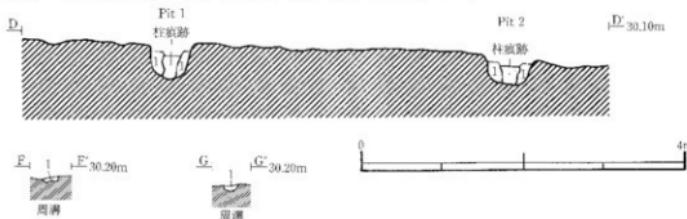
SI11 積穴住居跡、SK26 土坑を切り、SX33 に切られている。

【出土遺物】 各柱穴掘り方埋め土より縄文土器片、土器器窓片、壺片が少量出土した。

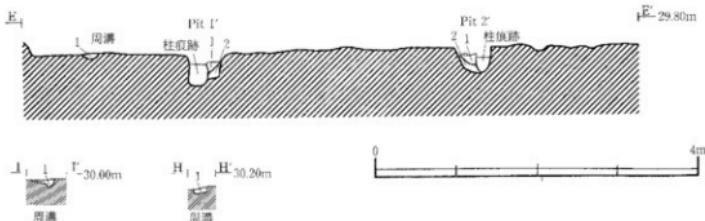
SI11 積穴住居跡 調査区の東南部で SI10 積穴住居跡と重複して検出された。遺構の東南部分は調査区外へ延びている。削平のため周溝の一部と柱穴 4 基のみを検出した。平面形は方形で、北辺が 5.5m 以上、西辺が 6.2m である。方向は、西辺で N-31°-E である。周溝は北辺部と西辺部を検出し、上幅 12~20cm、下幅 10~18cm、深さ 5~16cm である。周溝内の堆積土は黒褐色シルトである。柱穴の掘り方は、一辺が 37~52cm × 34~42cm の隅丸長方形で、柱痕跡は 16~22cm の円形もしくは楕円形である。柱穴の深さは遺構検出面より 19~44cm である。柱間寸法は、3.3~3.9m である。掘り方の埋め土は、褐色シルト、暗褐色シルトである。

SK26 土坑を切り、SI10 積穴住居跡、SX33 に切られている。

【出土遺物】 各柱穴掘り方埋め土より土器器窓片、壺片が少量出土した。



第5図 SI10 積穴住居跡断面図



第6図 SI11 積穴住居跡断面図

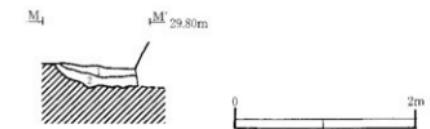
SX 4 調査区の東壁沿いで溝状に一部を検出し、構造が調査区外へ延びるため全体の形状や規模は不明である。検出総長は、10.2m、上幅は79cm、深さは18~23cmである。壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は、黒褐色シルト、暗褐色シルトである。

〔出土遺物〕 堆積土中より底部に直径4mmの穿孔のある土器壺 D-124 壺（第17図9）が出土した。その他土器壺片、赤焼き土器壺片、平瓦片が少量出土した。

SX33 調査区の東半で検出し、検出総長は23.4m、上幅は178~306cm、下幅は117~240cm、深さは12~41cmで、壁は西壁では緩やかに立ち上がるが東壁ではほぼ直立気味に立ち上がっている。断面形は逆台形で底面は凹凸が著しい。堆積土は、黒褐色シルト及び粘土質シルト、暗褐色シルト及び粘土質シルト、にぶい黄褐色粘土質シルト、灰黄褐色粘土質シルトなどである。多量の土器壺片が出土している。

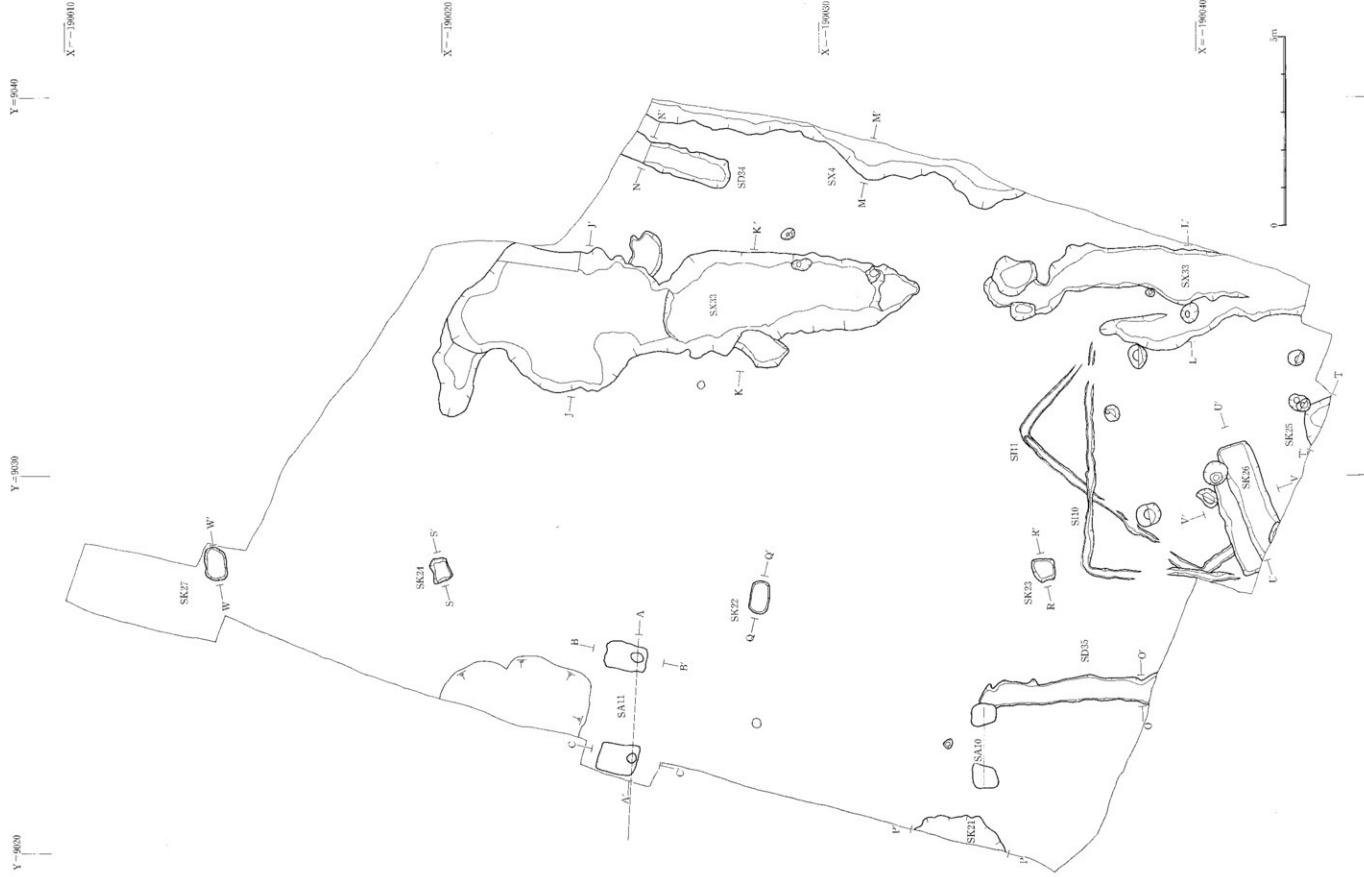
SI10、SI11 穴穴住居跡を切っている。

〔出土遺物〕 堆積土中より多量の土器壺（D-79~81、83~85、87~100、108~110、112~116、125~130）D-107 壺（第13図13）、赤焼き土器 D-82、86、106 壺（第12図1~3）、D-101~105 小皿、須恵器 E-26 壺（第13図14）、F-33~36 丸瓦（第14図1~4）、G-64~67 平瓦（第14図5~16と第15図1~2）、P-3 羽口（第12図9）、P-4 カマド支脚（第12図11）、K-25 石鎚（図版14-2）、打製石斧の可能性のある石器 K-26（図版14-3）、N-11 鉄製品（図版14-4）、N-12 鉄鋤（図版14-5）が出土した。その他にも土器壺片、甕片、赤焼き土器壺片、丸瓦片、平瓦片、縄文土器片、石器などが出土した。これらのうち土器壺類はクロロ調整され内面へラミガキ・黒色処理されている。ヘラミガキは体部が横方向、底部が放射状である。底部の切り離し技法は回転糸切り無調整であるが、切り離し後手持ちヘラケズリを施しているものが一点含まれている（D-94）。又、体部下端に回転ヘラケズリを施しているもの（D-91）や手持ちヘラケズリを施しているもの（D-112、113）を含み、底部には「×」の線刻のあるもの（D-91、109、110、112、113、114、128）、「-」の線刻のあるもの（D-115、116）がある。赤焼き土器の壺と小皿は、内外面クロロ調整され、底部の切り離し技法は、回転糸切り無調整である。

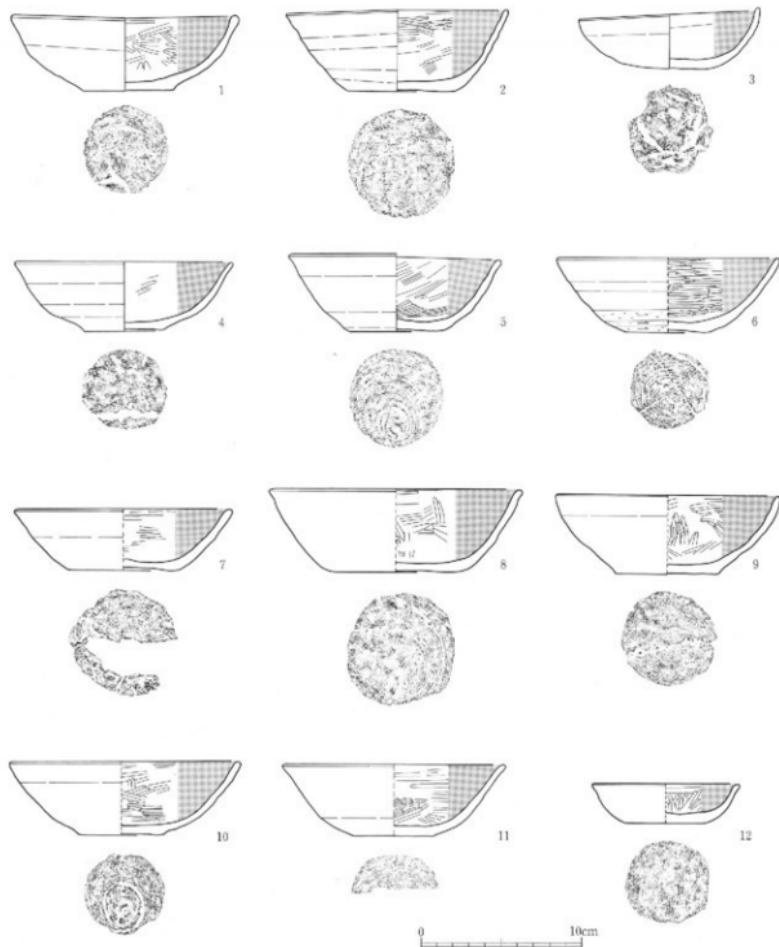


第7図 SX4 断面図



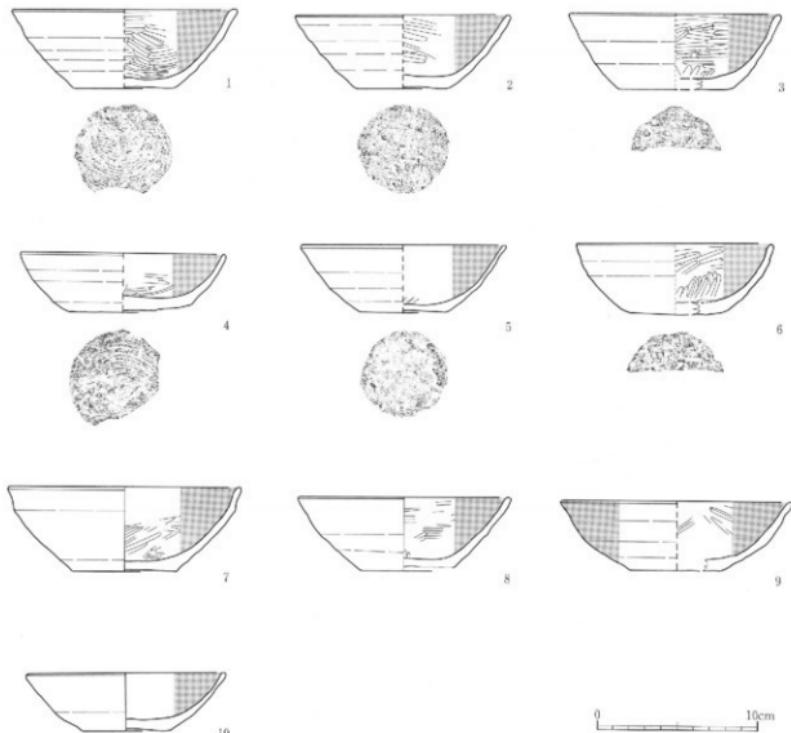


第6回 第11次懇親会平野四（11/100）



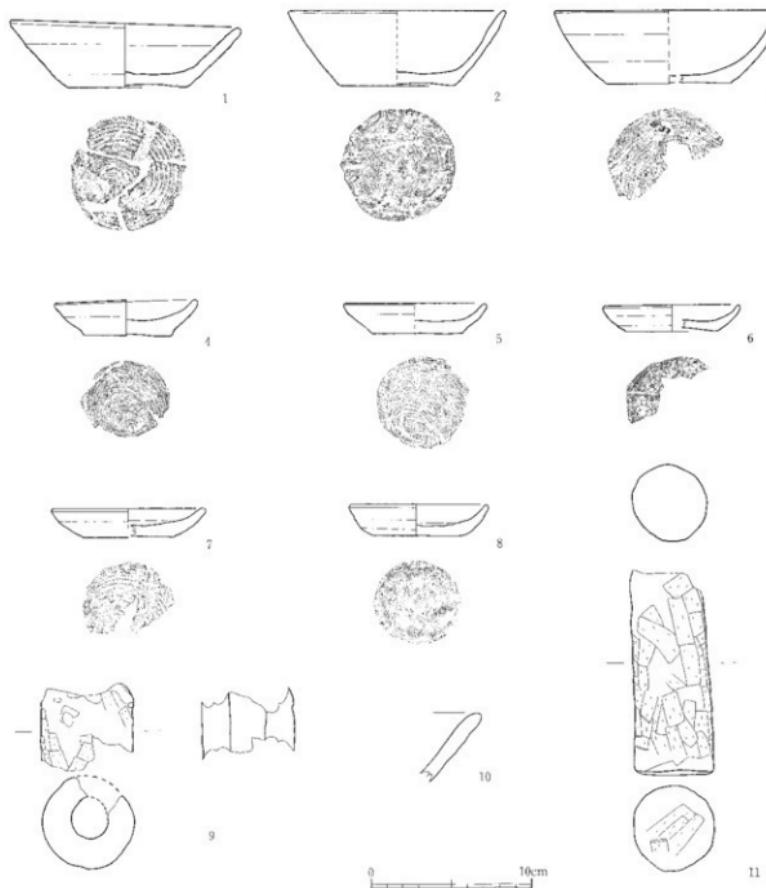
回数 番号	寸詮番号	種類・器形	出土地點	法 基 高 度 mm	口 徑 mm	底 径 mm	外 面 理 想	内 面 理 想	備 考	参考 図版	
1	D-80	土器鉢・坪	SX33 1層	5.6	14.2	5.6	ロクロナデ	口輪余切り	ミガキ・黒色處理	灯芯の痕跡あり	11-2
2	D-81	土器鉢・坪	SX33 1層	5.15	13.8	6.7	ロクロナデ	口輪余切り	ミガキ・黒色處理	灯芯の痕跡あり	11-3
3	D-83	土器鉢・坪	SX33 1層	3.8	11.2	5.0	ロクロナデ	口輪余切り	ミガキ・黒色處理	油煙灰付着物あり	11-5
4	D-84	土器鉢・坪	SX33 1層	4.28	13.6	5.6	ロクロナデ	口輪余切り	ミガキ・黒色處理	油煙灰付着物あり	11-6
5	D-85	土器鉢・坪	SX33 1層	4.9	(13.7)	5.8	ロクロナデ	口輪余切り	ミガキ・黒色處理	灯芯の痕跡あり	
6	D-91	土器鉢・坪	SX33 1層	4.7	(13.8)	5.1	ロクロナデ・ハラケズリ	口輪余切り	ミガキ・黒色處理	油煙灰付着物あり「×」の跡既	12-13
7	D-87	土器鉢・坪	SX33 1層	3.9	(13.6)	6.8	ロクロナデ	口輪余切り	ミガキ・黒色處理	油煙灰付着物あり	11-8
8	D-88	土器鉢・坪	SX33 1層	5.2	(15.8)	7.8	ロクロナデ	口輪余切り	ミガキ・黒色處理	灯芯の痕跡あり	11-9
9	D-89	土器鉢・坪	SX33 1層	5.0	(14.0)	6.4	ロクロナデ	口輪余切り	ミガキ・黒色處理		11-10
10	D-95	土器鉢・坪	SX33 1層	4.6	(14.5)	5.6	ロクロナデ	口輪余切り	ミガキ・黒色處理		11-15
11	D-96	土器鉢・坪	SX33 1層	4.5	(13.9)	5.1	ロクロナデ	口輪余切り	ミガキ・黒色處理		11-16
12	D-99	土器鉢・坪	SX33 1層	2.5	(9.2)	(5.2)	ロクロナデ	口輪余切り	ミガキ・黒色處理	油煙灰付着物あり	11-19

第10図 SX33 出土遺物(1)



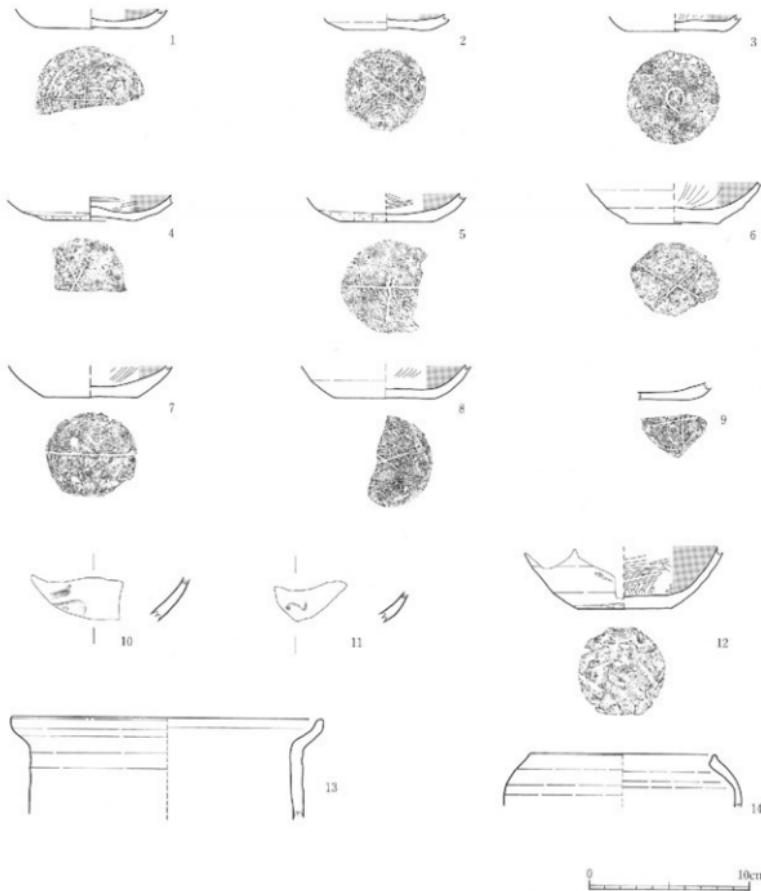
深層 番号	縁羽・形態	出土地點 遺構	層位	法 規 (cm)	外 形 特 徴			内 面 特 徴			備 考	写真 No.
					口縁部	体	底 部	口縁部	全体	底 部		
1	D-93	土師桶+环	SX33	1層	4.95	(14.05)	6.4	ロクロナド	回転丸切り	ミガキ・黑色處理	油漬灰付骨物あり	31-13
2	D-118	土師桶+环	SX33	1層	4.6	(13.4)	5.8	ロクロナド	回転丸切り	ミガキ・黑色處理	油漬灰付骨物あり	31-22
3	D-98	土師桶+环	SX33	1層	4.8	(13.2)	7.2	ロクロナド	回転丸切り	ミガキ・黑色處理	油漬灰付骨物あり、摩滅が著しい	31-18
4	D-92	土師桶+环	SX33	1層	3.7	(12.8)	6.6	ロクロナド	回転丸切り	ミガキ・黑色處理		31-12
5	D-136	土師桶+环	SX33	1層	4.2	(12.8)	5.3	ロクロナド	ミガキ・黑色處理	底部厚板		31-23
6	D-87	土師桶+环	SX33	1層	4.5	(12.2)	6.0	ロクロナド	ミガキ・黑色處理	油漬灰付骨物あり、底部厚板		31-17
7	D-89	土師桶+环	SX33	1層	5.3	(7.4)	6.5	ロクロナド	回転丸切り	ミガキ・黑色處理	油漬灰付骨物あり	31-11
8	D-79	土師桶+环	SX33	1層	4.6	13.3	5.8	ロクロナド	ミガキ・黑色處理	底部灰付骨物あり		31-1
9	D-100	土師桶+环	SX33	1層	(4.35)	(14.4)	(5.6)	ロクロナド・黑色処理	ミガキ・黑色處理	底部灰付骨物あり		31-20
10	D-127	土師桶+环	SX33	1層	3.85	(12.2)	3.4	ロクロナド	回転丸切り	黑色處理	全体に摩滅が著しい	31-24

第11図 SX33 出土遺物 (2)



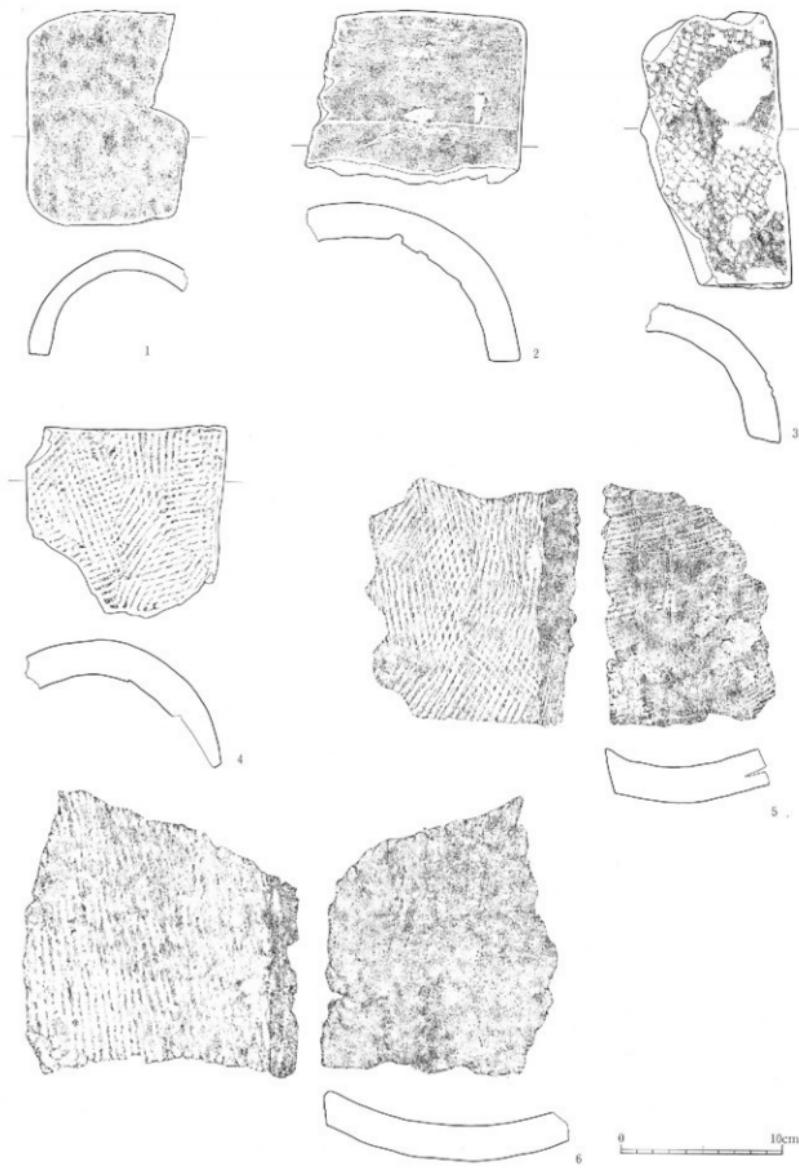
図版 番号	世耕考古号	種別・形態	出土地点	法 量(cm)	外 国 調 査	内 国 調 査	備 考	参考 図版
				通横 幅高 寸幅 高さ	口縁部 体 高 底 高	口縁部 体 高 底 高		
1	D-82	小鏡±土器	SX33 1層	4.2 14.3 7.4	クロロナデ	口輪糸切り	打芯の痕跡あり	11-4
2	D-86	漆器±漆耳杯	SX33 1層	4.7 (13.6) 7.4	クロロナデ	口輪糸切り	糸切りしている	11-7
3	D-101	漆器±漆耳杯	SX33 1層	(4.6) 14.2 (7.8)	クロロナデ	口輪糸切り		11-23
4	D-101	漆器±漆耳杯	SX33 1層	2.2 8.9 5.4	クロロナデ	口輪糸切り		12-2
5	D-102	漆器±漆耳杯	SX33 1層	1.9 8.9 5.7	クロロナデ	口輪糸切り		12-3
6	D-103	漆器±漆耳杯	SX33 1層	(1.65) (8.6) (3.6)	クロロナデ	口輪糸切り	糸滅が著しい、打芯の痕跡あり	12-4
7	D-104	漆器±漆耳杯	SX33 1層	1.8 9.6 5.6	クロロナデ	口輪糸切り		12-5
8	D-105	漆器±漆耳杯	SX33 1層	1.95 8.4 5.4	クロロナデ	口輪糸切り	糸滅が著しい	12-6
9	P-3	漆耳杯±漆耳杯	SX33 1層	(5.5) 外縁 内縁	—	—	糸滅付着	14-8
10	D-129	漆器±土器	SX33 1層	(4.2) — —	クロロナデ	—	糸滅化	12-31
11	P-4	漆耳杯±漆耳杯	SX33 1層	(12.8) — 5.2	—	—		14-7

第12図 SX33 出土遺物 (3)

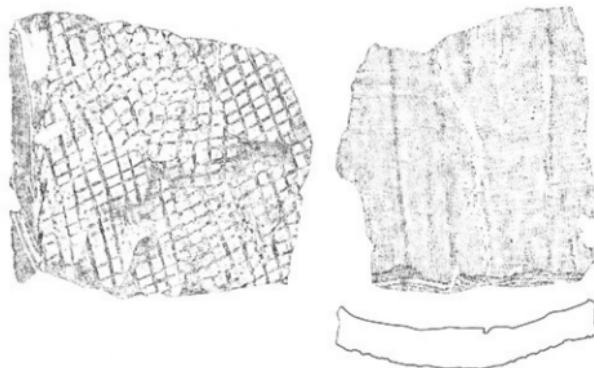
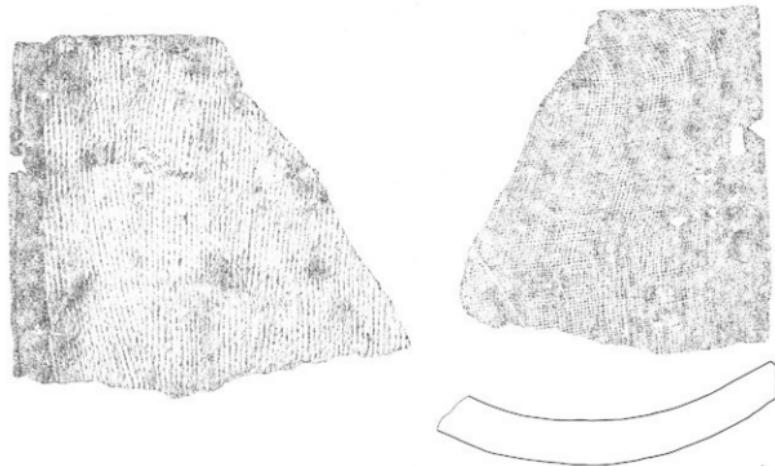


図版番号	登録番号	種別・基別	出土地点	地 直 (m)	外 四 角 長 寸	内 四 角 長 寸	備 考	写真				
				標高	口径	底径	口縫部	体 部	底 部	口縫部	体部	底部
1	D-108	土師器・片	SX33 1層	-	-	7	ロクロナデ	口縫部切切り	ミガキ・黑色処理	白練状付骨物・「+」の彫刻	12-14	
2	D-109	土師器・片	SX33 1層	-	-	5.3	ロクロナデ	口縫部切切り	ミガキ・黑色処理	「×」の彫刻	12-15	
3	D-110	土師器・片	SX33 1層	-	-	5.9	ロクロナデ	口縫部切切り	ミガキ・黑色処理	「○」の彫刻	12-16	
4	D-112	土師器・片	SX33 1層	-	-	5.6	ロクロナデ→ヘラクズリ	ヘラクズリ	ミガキ・黑色処理	「×」の彫刻	12-17	
5	D-113	土師器・片	SX33 1層	-	-	6	ロクロナデ→ヘラクズリ	口縫部切切り	ミガキ・黑色処理	白練状付骨物・「+」の彫刻	12-18	
6	D-114	土師器・片	SX33 1層	-	-	3.6	ロクロナデ	口縫部切切り	ミガキ・黑色処理	「×」の彫刻	12-19	
7	D-115	土師器・片	SX33 1層	-	-	5.9	ロクロナデ	口縫部切切り	ミガキ・黑色処理	「-」の彫刻	12-20	
8	D-126	土師器・片	SX33 1層	-	-	6.2	ロクロナデ	口縫部切切り	ミガキ・黑色処理	「×」の彫刻	12-1	
9	D-130	土師器・片	SX33 1層	-	-	-	ロクロナデ	口縫部切切り	ミガキ・黑色処理	「×」の彫刻	12-7	
10	D-122	土師器・片	SX33 1層	-	-	-	ロクロナデ	ミガキ・黑色処理	無	無	12-9	
11	D-130	土師器・片	SX33 1層	-	-	-	ロクロナデ	ミガキ・黑色処理	無	無	12-8	
12	D-94	土師器・片	SX33 1層	-	-	6.0	ロクロナデ→ヘラクズリ	ヘラクズリ	ミガキ・黑色処理	黒焼あり、白練状付骨物	11-14	
13	D-107	土師器・片	SX33 1層	-	19.6	-	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	12-16	
14	E-26	土師器・片	SX33 1層	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	12-17	

第13図 SX33 出土遺物 (4)



第14図 SX33 出土遺物 (5)



0 10cm

図版 番号	色目 番号	輪郭	出土場所	特 徴	後	前 考	年次 図版
14-1	F-33	丸丸	SX33	1層 凸面 ナメド 開口部 布目模→ケツリ			13-1
14-2	F-35	丸丸	SX33	1層 凸面 ナメド・工具痕、凹面 布目模			13-2
14-3	F-36	丸丸	SX33	1層 凸面 格子叩き、一部スリ落し、凹曲 布目模、余切り痕			13-4
14-4	F-34	丸丸	SX33	1層 凸面 平行叩き、凹曲 布目模			13-2
14-5	G-64	平丸	SX33	1層 凸面 平行叩き、凹曲 布目模			13-5
14-6	G-66	平丸	SX33	1層 凸面 刺繍目 深凹曲 布目模→ナメド			13-7
15-1	G-65	平丸	SX33	1層 凸面 刺繍目 深凹曲 布目模			13-6
15-2	G-67	平丸	SX33	1層 凸面 格子叩き、凹曲 布目模、擦目模			13-8

第15図 SX33 出土遺物 (6)

出土遺物の90%以上を土師器坏類が占めており、その数は300個体を越えるものと考えられる。その中には坏の外側に油煙状の付着物（D-79、83、84、87、90、91、92、93、98、99）や灯芯の痕跡（D-80、81、82、85、88、103）が認められるものが含まれている。出土した瓦のうち、G-65、66平瓦は凸面繩叩き、凹面に粗い布目旋が認められる。

SD34 溝跡 総長2.8m以上で、南北方向に延びる溝跡である。上幅72~78cm、下幅42~52cm、深さ5~17cmで、壁は緩やかに立ち上がり、断面形は扁平な逆台形である。底面はほぼ平坦である。方向はN-8°-Eで、堆積土は暗褐色粘土質シルトである。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

SD35 溝跡 総長4.6m以上で、南北方向に延びる溝跡である。上幅53~79cm、下幅36~62cm、深さ9~15cmで、壁は緩やかに立ち上がり、断面形は舟底形である。底面は凹凸が著しい。方向はN-9°-Wで、堆積土は黒褐色シルトである。

SA10 杖列を切っている。

〔出土遺物〕 堆積土中よりカエリのない須恵器 E-25 蓋（第17図10）の他、土師器坏片、甕片、赤焼き土器坏片、平瓦片が少量出土した。

SK21 土坑 南北250cm以上、東西80cm以上の楕円形の土坑で、深さは50cmである。底面は擦り鉢状である。堆積土は、暗褐色シルト、黒褐色シルト、灰黄褐色シルト質粘土である。

〔出土遺物〕 堆積土中より須恵器坏片、平瓦片が少量出土した。

SK22 土坑 南北49cm、東西86cmの隅丸長方形の土坑で、深さは54cmである。底面は平坦である。堆積土は褐色シルト質粘土、暗褐色シルト質粘土である。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

SK23 土坑 南北53cm、東西59cmの隅丸長方形の土坑で、深さは60cmである。底面は平坦である。堆積土は黒褐色シルトである。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

SK24 土坑 南北47cm、東西60cmのやや不整な隅丸長方形の土坑で、深さは18cmである。底面は凹凸が著しい。堆積土は褐色シルト質粘土である。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

SK25 土坑 南北105cm以上、東西137cm以上の円形の土坑で、深さは23cmである。底面は平坦である。堆積土は暗褐色シルト質粘土である。

SI10、SI11 突穴住居跡を切っている。

〔出土遺物〕 堆積土中よりロクロ調整され、内面ヘラミガキ・黒色処理されている土師器 D-117 坯（第17図8）、K-24 石鐵（図版14-1）が出土した他、土師器坏片、鐵滓が出土した。

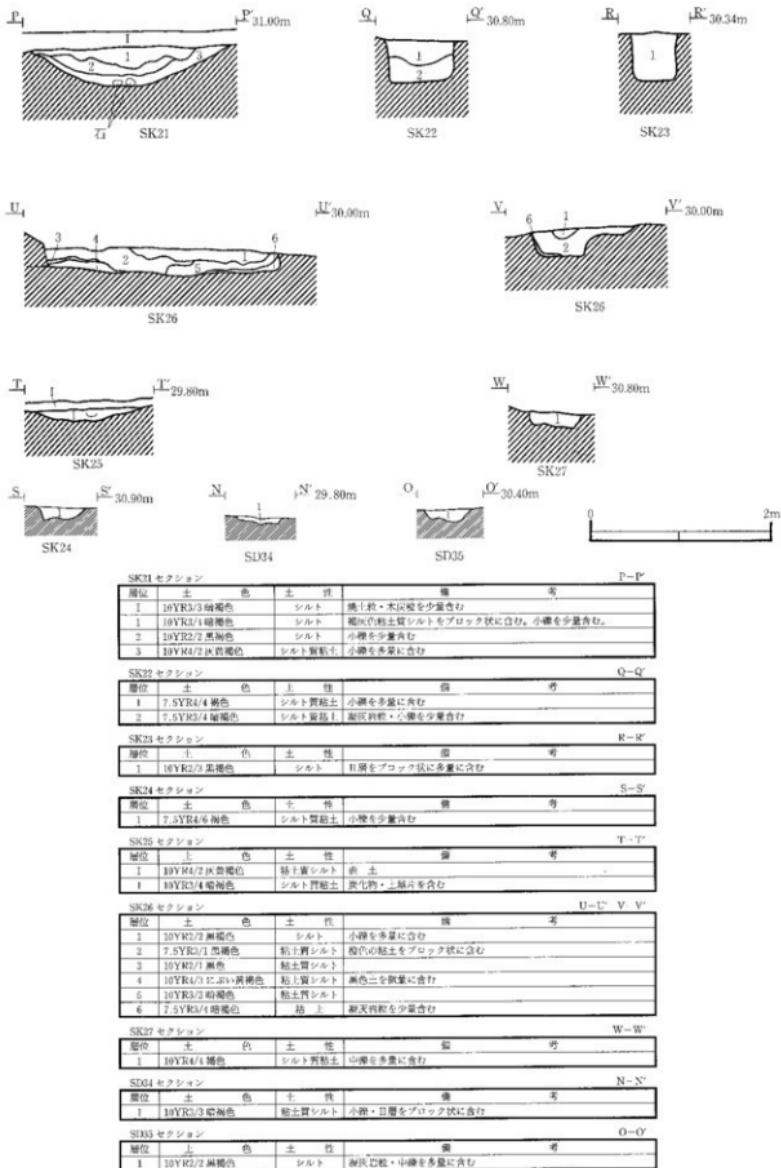
SK26 土坑 南北132cm、東西330cmの隅丸長方形の土坑で、深さは33cmである。底面は平坦である。堆積土は、黒色粘土質シルト、黒褐色シルト及び粘土質シルト、暗褐色粘土質シルト及び粘土、にぶい黄褐色粘土質シルトである。

SI10、SI11 突穴住居跡に切られている。

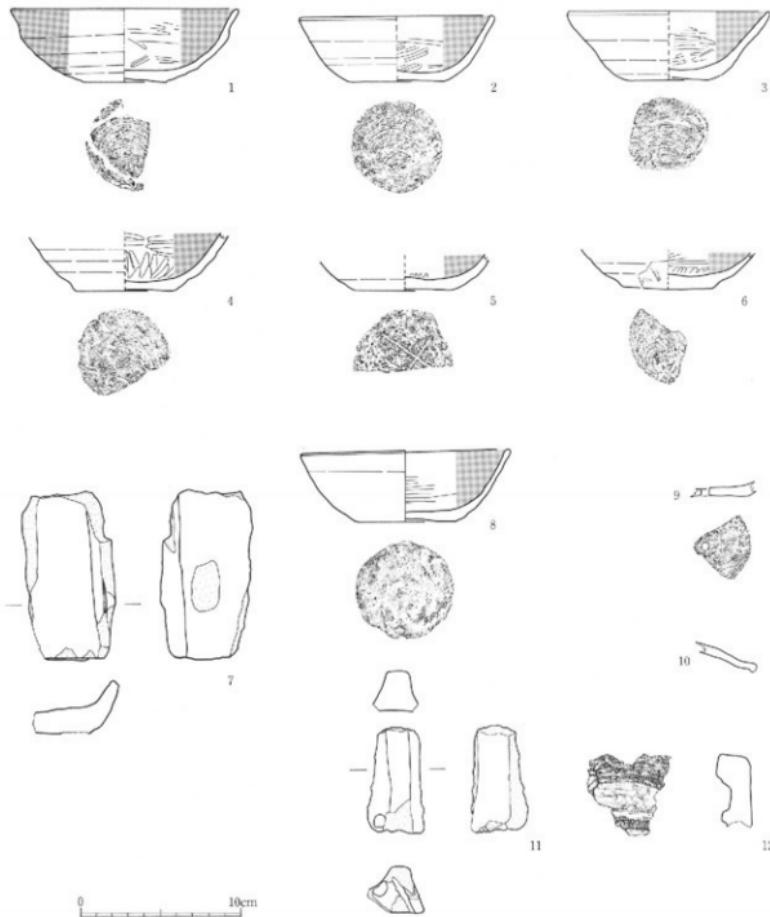
〔出土遺物〕 堆積土中より土師器坏片、甕片、須恵器蓋片、縞文土器片が出土した。

SK27 土坑 南北49cm、東西83cmのやや不整な長方形の土坑で、深さは18cmである。底面は凹凸が著しい。堆積土は、褐色シルト質粘土である。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

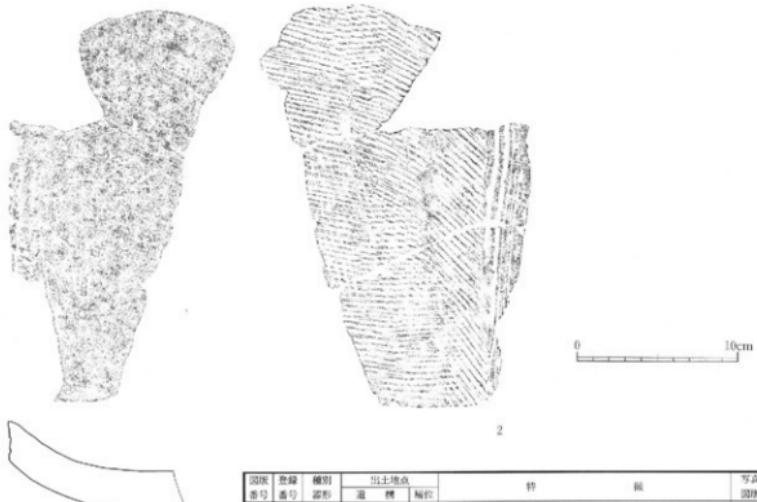
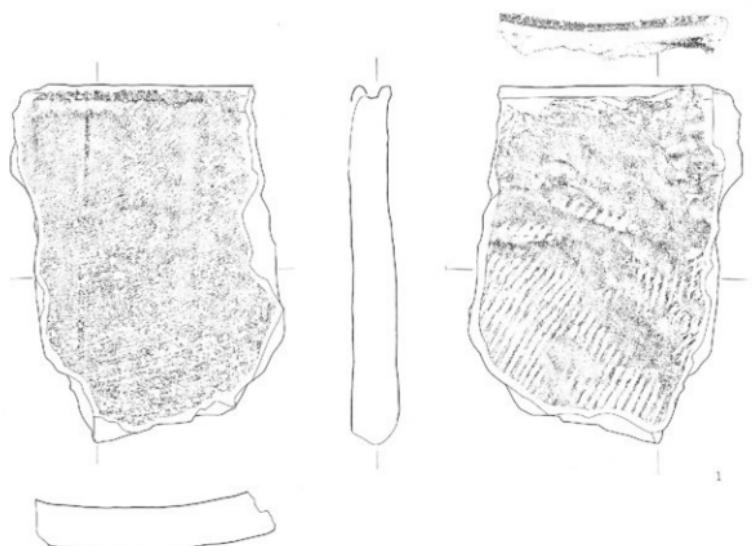


第16図 第11次調査断面図（土坑・溝跡）



団版 番号	登録番号	種類・器形	出土地点	法 量(cm)	外 形 概 要	内 部 特 徴	備 考	等級 回数
1	D-121	土器鉢・环	遺構検出面	4.6 (14.2)	口径 底径	ロクロナデ 黑色處理	回転ふ切り ミガキ・黑色處理	14-14
2	D-122	土器鉢・环	遺構検出面	4.1 (12.2)	6.0	ロクロナデ	回転ふ切り ミガキ・黑色處理	14-15
3	D-129	土器鉢・环	遺構検出面	4.3 (12.6)	5.0	ロクロナデ	回転ふ切り ミガキ・黑色處理	14-13
4	D-119	土器鉢・环	遺構検出面	— —	6.4	ロクロナデ	回転ふ切り ミガキ・黑色處理	14-11
5	D-111	土器鉢・环	遺構検出面	— —	6.4	ロクロナデ	回転ふ切り ミガキ・黑色處理	「×」の建設
6	D-123	土器鉢・环	遺構検出面	— —	(5.8)	ロクロナデ	回転ふ切り ミガキ・黑色處理	墨書きあり
7	E-27	縁	遺構検出面	凸面・凹面 ヘラケズリ	—	—	—	漢字画
8	D-117	土器鉢・环	SKC61裏	4.5 13	6.4	ロクロナデ	回転ふ切り ミガキ・黑色處理	14-6
9	D-124	土器鉢・环	SX 4 1層	— —	—	—	穿孔 ミガキ・黑色處理	14-9
10	E-25	遺構縁	SD05 1層	— —	—	ロクロナデ	ロクロナデ	14-10
11	F-37	木 痕	遺構検出面	凸面 ヘラケズリ・折目痕有り	凹面 二次削面	—	—	14-19
12	F-38	新丸瓦	遺構検出面	瓦当表面東面 凸面 クズリ	—	—	—	14-20

第17図 第11次調査出土遺物(1)



図版 番号	器種 番号	種別 器形	出土地点 遺物	特 徴	圖版 番号
1 G-68	牙平瓦	追焼輪出垂	凸面 平行印S、凹面 刃目直・輪骨板・クロ丸き籠底文軒平瓦		14-21
2 G-69	平 瓦	追焼・SX33	1枚 凸面 平行印S、凹面 刃目直・輪骨板		14-24

第18図 第11次調査出土遺物(2)

3. まとめ

今回の第11次調査で発見された遺構は、柱列2列、溝跡2条、堅穴住居跡2軒、土坑7基、性格不明遺構2基、小柱穴、ビットなどである。ここでは、以下の項目について若干の考察を加え「まとめ」としたい。

(1) SA10・11 柱列について

今回の調査では、一昨年の第9次調査で発見した寺院の主要な建物と見られるSB 3掘立柱建物跡の東側と北東側においてSA10・SA11を検出した。SA10は、削平のため遺構の遺存状況がきわめて悪く、掘り方の底面付近を検出したのみであるが、各々の掘り方の形状や規模がほぼ同一であることと真東西方向に並ぶことから柱列と考えたい。

SA11は、真東西方向に一間分のみ検出し、さらに西側に延びていく可能性が残されている。柱穴は、2段に掘り込まれ、南壁がえぐられるように横方向に掘られている。また、柱痕跡もそれにあわせて北側に斜めに傾いているなど特殊な様相を示し、上部構造については明らかでない。年代は、SA10・11とも掘り方の埋め土にロクロ土師器片や赤焼き土器片以外の遺物がみられないことから、9世紀後半以降でも古代の中で捉えられるものと考えられる。遺構の性格については、それぞれ一間分のみの検出に留まっており、全容が不明であるため明らかにし得なかった。

(2) SX33 出土遺物について

今回の調査で、SX33より多量の土師器環類を含む遺物が出土した。出土した遺物には土師器の他に、赤焼き土器壺、小皿、須恵器壺、丸瓦、平瓦、羽口、土製支脚、石器、鉄製品がある。図示した遺物の中で全体の器形の把握が可能なものは、土師器環22点、赤焼き土器環3点、赤焼き土器小皿5点である。

このうち年代の検討が可能な土師器壺、赤焼き土器壺・小皿について若干の考察を加えたい。

SX33から出土した土師器環は、すべてロクロ調整され、内面はヘラミガキ・黒色処理されている。このような土師器は東北地方南部の土師器編年式の表衫ノ入式に該当するものである(註1)。表衫ノ入式の土師器環については主に、須恵器・赤焼き土器との共伴関係、口径に対する底径の比率(以下、底口比と略す)、製作技法などにより編年的細分が試みられており、表1のような変遷が迫れる。これによれば、年代が降るに従って、環類全体の中で赤焼き土器環の占める割合が増加し、須恵器環の割合が減少・消失する。また、底口比が減少し、器面再調整が簡略化される傾向にあるとされている(註2)。

遺跡名 出土遺構名	宮司 SI20 IV A群	青木 SI11	古山 SI 8	東山 土師器	米沢市 SI 2	宮司 SI20 B群	安久原 SI 2	鹿水 SI 1	鹿島 SK 1-SK 4	櫛田前 SD 1-SD 2
赤焼き土器山土壙	0%	0%	0%	0%	0%	0%	45%	42%	63%	98%
須恵器出土土壙	28%	16%	23%	31%	0%	0%	11%	6%	0%	0%
底口比	0.6	0.52	0.52	0.46	0.44	0.43	0.36	0.38	0.39	0.4
外側調節 回転ケズリ	ロクロナデ 手押ケズリ	ロクロナデ 手押ケズリ	ロクロナデ 手押ケズリ	ロクロナデ 手押ケズリ	ロクロナデ 手押ケズリ	ロクロナデ 手押ケズリ	ロクロナデ 手押ケズリ	ロクロナデ 手押ケズリ	ロクロナデ 手押ケズリ	ロクロナデ 手押ケズリ
切り離し切法	ヘア切り	ヘア切り	ヘア切り	ヘア切り	ヘア切り	ヘア切り	ヘア切り	ヘア切り	ヘア切り	ヘア切り
年代	9C末~9C初	9C中葉	10C前半	10C中葉	10C前半	10C中葉	10C前半	10C中葉	10C中葉	10C前半

表1 表衫ノ入式期における土師器環の変遷

SX33から出土した土師器環の特徴をあげると以下になる。第1に、赤焼き土器を共伴しているが須恵器を含まないこと。第2に、底口比は0.37~0.55の範囲に分布し0.39前後に集中していること。第3に、外側調節は底部下端に回転ヘアケズリを施しているものを1点含むほか(D-91)は、底部回転糸切り無調整のものが主体(21点)を占めていることである。以上の特徴を表1の変遷に当てはめると、須恵器環を含まない点や底口比から鹿島遺跡SK 1・SK 4出土土器群の傾向に近いことが窺える。鹿島遺跡SK 1・SK 4出土土器群については、10世紀中葉の年代が与えられている。従ってSX33出土土師器にも概ね10世紀中葉頃の年代が考えられよう。次に、赤焼き土

器壺・小皿について検討していく。SX33 から出土した赤焼き土器壺・小皿は内外面クロロ調整され、底部の切り離し技法は回転糸切り無調整である。色調は浅黄橙色を呈し、小皿の中には赤みを帯びたもの(D-101, D-102)が含まれる。胎土には粗い砂粒を含んでいる。法量は、壺が口径13.6~14.3cm、底径7.4~7.8cm、器高4.2~4.7cmで、底口比は0.51~0.55の範囲に分布している。小皿は、口径8.4~9.6cm、底径5.4~5.7cm、器高1.65~1.95cmを計り、壺と小皿の間にははっきりとした法量の違いが見出せる。

赤焼き土器については、多賀城跡出土土器群中、内外面クロロ調整され酸化焰焼成を受けているといった特徴を同じくすることから、須恵系土器の範疇に含まれるものである。須恵系土器は、多賀城跡出土土器群の E 群土器及び F 群土器に見られる(註3)。このうち須恵系土器に小皿が出現するのは F 群土器からである。F 群土器に位置付けられるものとしては、多賀城跡大畠地区 SE316-317-715 井戸跡出土土器群が挙げられる(註4)。この土器群は、F 群土器中、第61次調査 7 層出土土器群より新しく、政令跡 SK78 土坑出土土器群より古い様相を呈するもので10世紀後半代の中でも古い段階に比定されている。この土器群中須恵系土器小皿は、口径が9cm前後、器高が2cm以下に集中し、胎土に砂粒を含むものが主体を占めかつ壺と小皿の法量分化が顕然としているなど SX33 出土赤焼き土器壺・小皿と同様の特徴を示している。よって SX33 出土赤焼き土器壺・小皿も10世紀後半代でも古い段階と捉えられよう。

また、今回の調査でも壺類の内外面に油煙状の付着物(D-79, D-84, D-87, D-90, D-93)や内面に炭化した残渣物が付着したもの(D-92, D-98, D-99)、内面に赤褐色をした薄い皮膜状の付着物が見られるもの(D-83, D-91)、灯芯の痕跡の見られるもの(D-80, D-81, D-82, D-85, D-88, D-103)などが存在する。これらの壺類に関しては、灯明皿として使用されたり、何らかの仏教行事に使用されたもの(註5)と考えられる。

(3) 燕沢遺跡の第7次調査から第11次調査について

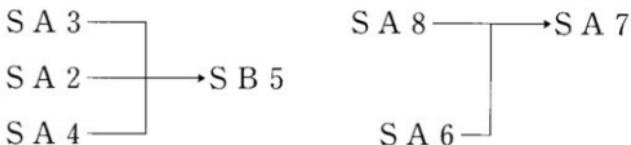
第7次調査以降、燕沢遺跡では遺跡範囲南東部分の丘陵頂上部平坦面において調査を実施してきた(第21図)。その結果、第8次調査で10世紀前半代のものと考えられる南北二面に廟のついた SB 2 捩立柱建物跡を検出し、形態から寺院の「僧房」と推定した。その北側ではこの建物と平行する SD 7 溝跡を検出し、建物との距離関係や出土遺物から寺院の区画溝と考えられた。第9次調査では SB 2 の南東で9世紀後半から10世紀前半代のものと考えられる SB 3 捩立柱建物跡を検出し、また SB 2 の南面において小規模な SB 5 捩立柱建物跡やそれと重複して SA 2, SA 3, SA 4 柱列を検出した。第10次調査では SB 3 の西側で SA 5 柱列、南側で SA 6, SA 7, SA 8 柱列を検出し寺院の中枢部を区画する溝跡と考えられた。今回の第11次調査は寺院中枢部東辺の区画施設を確認する目的で実施したが、小規模な柱列を2列検出したのみで該当する構造は発見できなかった(第20図)。

ここで上記の遺構群をまとめたのが以下の表2である。

次 数	遺 構 名	規 模	方 向
第8次	SB 2 捩立柱建物跡	梁行4間(9.6m)、桁行9間(14m)以上(東西棟)	N-4°-W
第9次	SB 3 捩立柱建物跡	梁行3間(6.5m)、桁行4間あるいは5間(4.5m)(東西棟)	N-1°-E
第9次	SB 5 捩立柱建物跡	梁行2間(3.8m)、桁行2間(4.3m)以上(東西棟)	N-5°-W
第9次	SA 2 柱	列 東西2間(4m)以上	E-1°-N
第9次	SA 3 柱	列 南北4間(5.6m)以上、東西3間(4.5m)以上	N-0°-S
第9次	SA 4 柱	列 東西1間(2.3m)以上	E-9°-N
第10次	SA 5 柱	列 南北5間(16.5m)	N-4.5°-W
第10次	SA 6 柱	列 東西6間(23.6m)以上	E-3°-N
第10次	SA 7 柱	列 東西6間(23.6m)以上	E-3°-N
第10次	SA 8 柱	列 東西3間(10.2m)以上	E-1°-S
第8次	SD 7 溝	跡 総長25.9m以上	E-4°-N

表2 燕沢遺跡第7次調査～第11次調査主要遺構

これらの遺構の中で重複関係が明らかなのは、次の2箇所においてである。



ここでは、ほぼ真東西方向のSA2、SA8が、それぞれ真北あるいは真東西方向よりやや西に偏するSB5、SA7に切られている。SA2とSA6については、掘り方の形状や規模が近似し共に赤焼き土器を含まないことから同時に存在した可能性がある。また、SA2とSA6のほぼ中央にSB3が配置されていることから、やや方向に違いが見られるが一連の遺構群となるように考えられる。SA8については、柱痕跡がSA6、SA7のように並ばずややがれがあり跡跡と見ることについては検討の余地が残されている。第19図のようにSA6と同時に存在する可能性も考えられる。第9次調査のSA2、SA3は同時に存在することなくSB5の建てられる以前に時期差のある遺構として存在していたであろう。SB2とSB3はいずれも寺院の中軸を構成する主要な建物跡と考えられる。これらの建物跡と跡跡などが9世紀後半代から10世紀前半代にかけて変遷して建っていたのであろう。



第19図 SA6・SA8 模式図

(註)

(註1) 氏家和典 「東北土師器の形式分類とその編年」『歴史』第14号 1957

(註2) 村田晃一 「宮城郡における10世紀前後の土器群」『福島考古』36号 1995

器の勉強会資料 1995

(註3) 白鳥良一 「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要』VII 宮城県多賀城調査研究所 1980

宮城県多賀城調査研究所年報「多賀城跡」III 第61次調査 1991

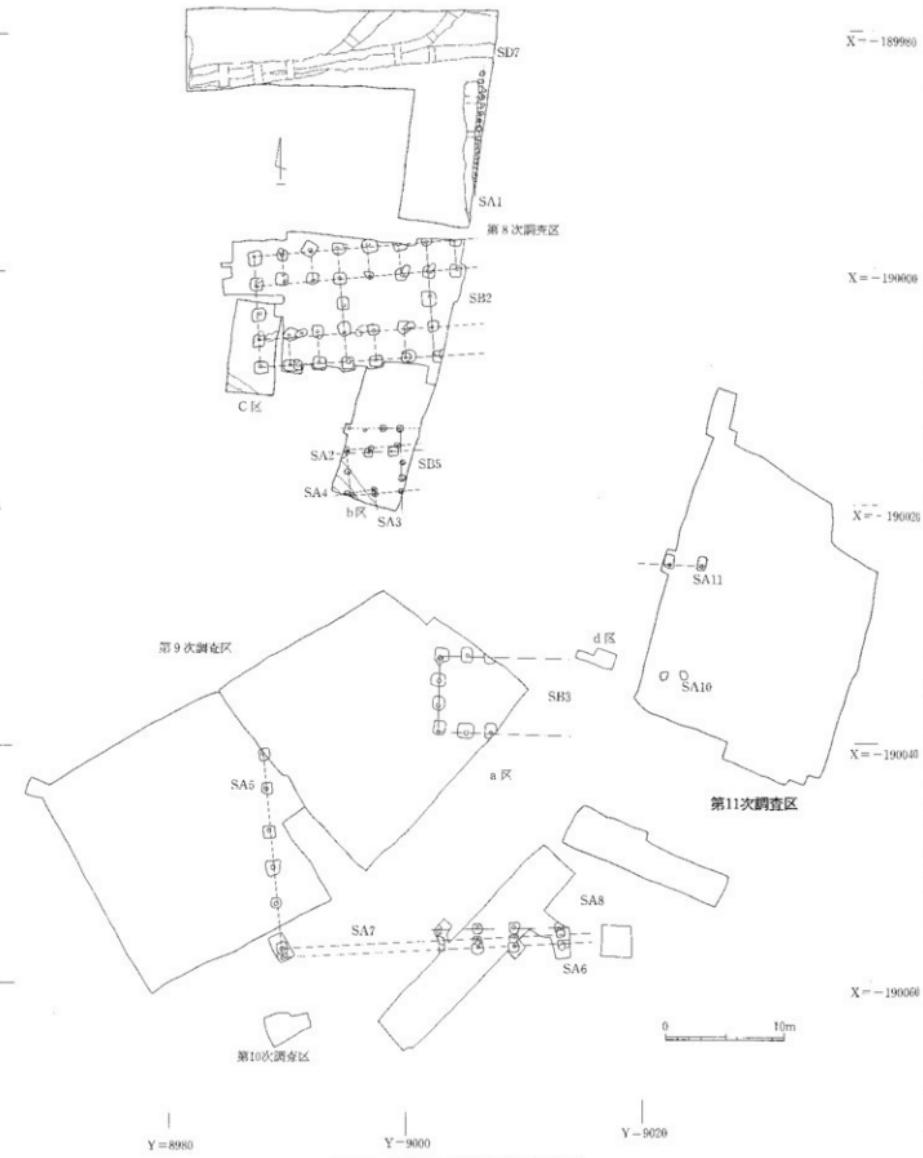
平成3年度に実施した多賀城跡鴻の池地区的発掘では、基本層位11層及び10層より出土したE群土器中にも須恵系土器の耳皿、环、台付鉢、鉢が少量含まれていることから、いわゆる赤焼き土器については9世紀後半代まで遡る可能性がある。

(註4) 宮城県多賀城跡調査研究所 「多賀城跡」II 第64次調査 1993

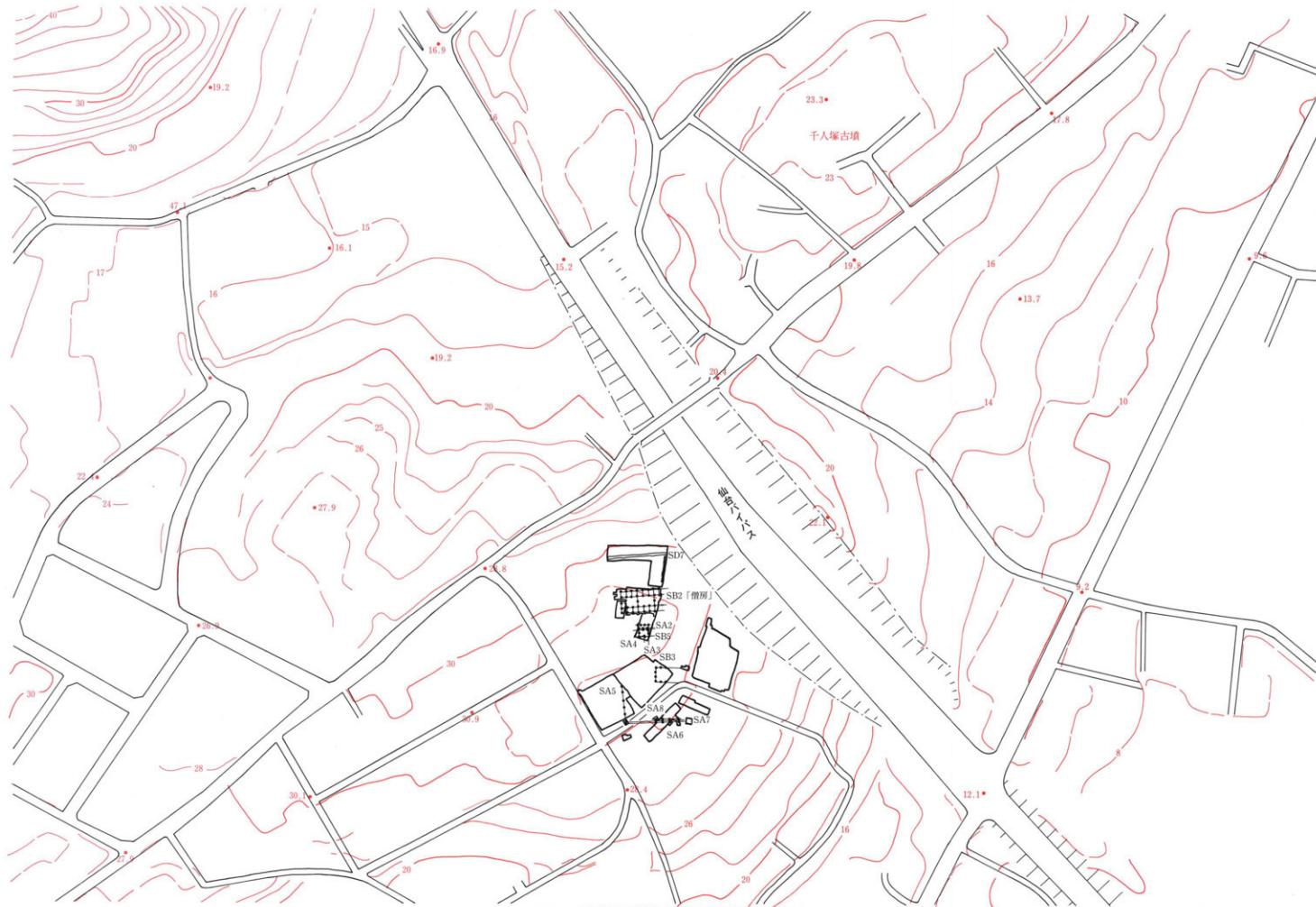
(註5) 仙台市文化財調査報告書第116集 「燕沢遺跡」(第3次) 1988

仙台市文化財調査報告書第195集 「仙台平野の遺跡群 XVI」 1995

仙台市文化財調査報告書第211集 「仙台平野の遺跡群 XV」 1996



第20図 燕沢遺跡遺構配置図 (1/400)



第21図 燕沢遺跡主要遺構配置図及び周辺地形図 (1/1000)

写 真 図 版



図版1 調査区全景（南西より）



図版2
SA10柱列全景
(南より)



図版3
SA11柱列 E1柱穴
(南より)



図版4 SA11柱列E2柱穴（西より）



図版5 SA11柱列E1柱穴土層断面（北より）



図版6 SX33遺物出土状況（北より）

図版7

SX33全景（北より）



図版8

SX33土層断面（南より）



図版9 SI10・SI11竪穴住居跡全景（南より）



図版10 SK25土坑土器壺 (D-117) 出土状況 (北東より)



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12



13



14



15



16



17



18



19



20



21



22



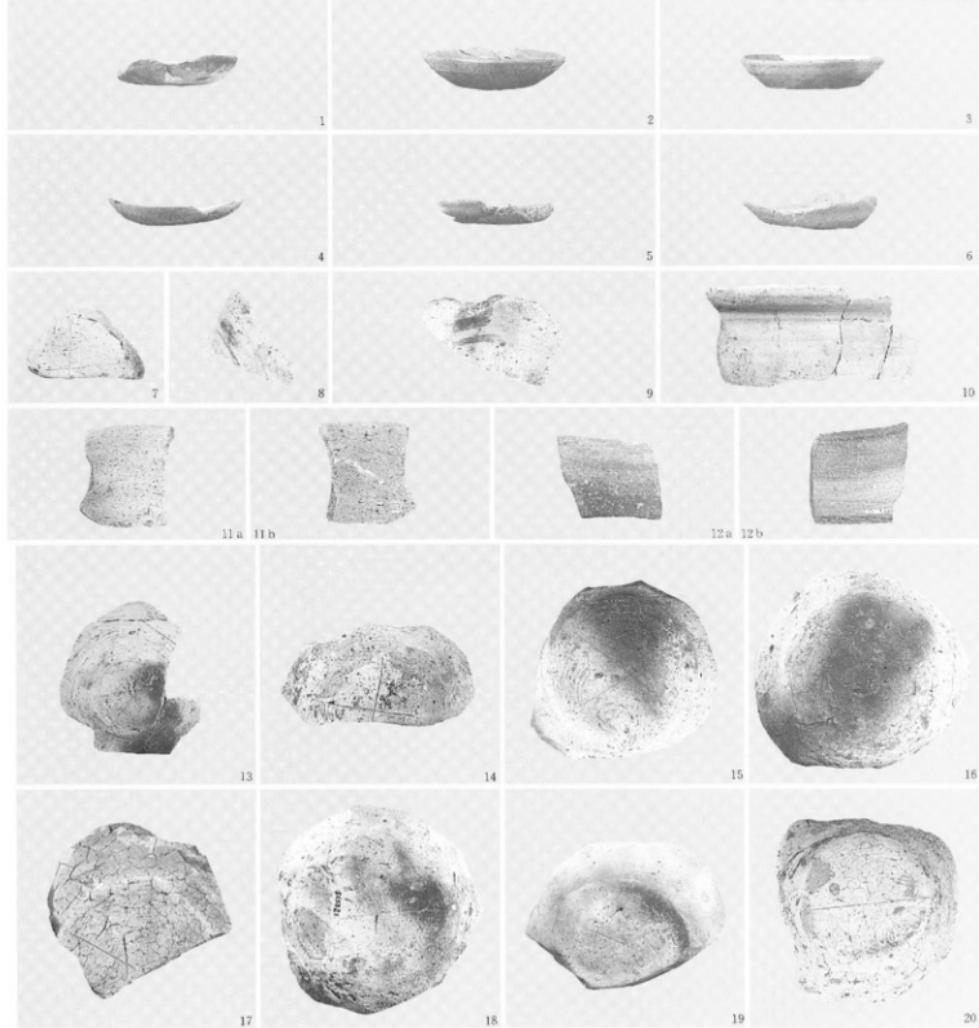
23



24

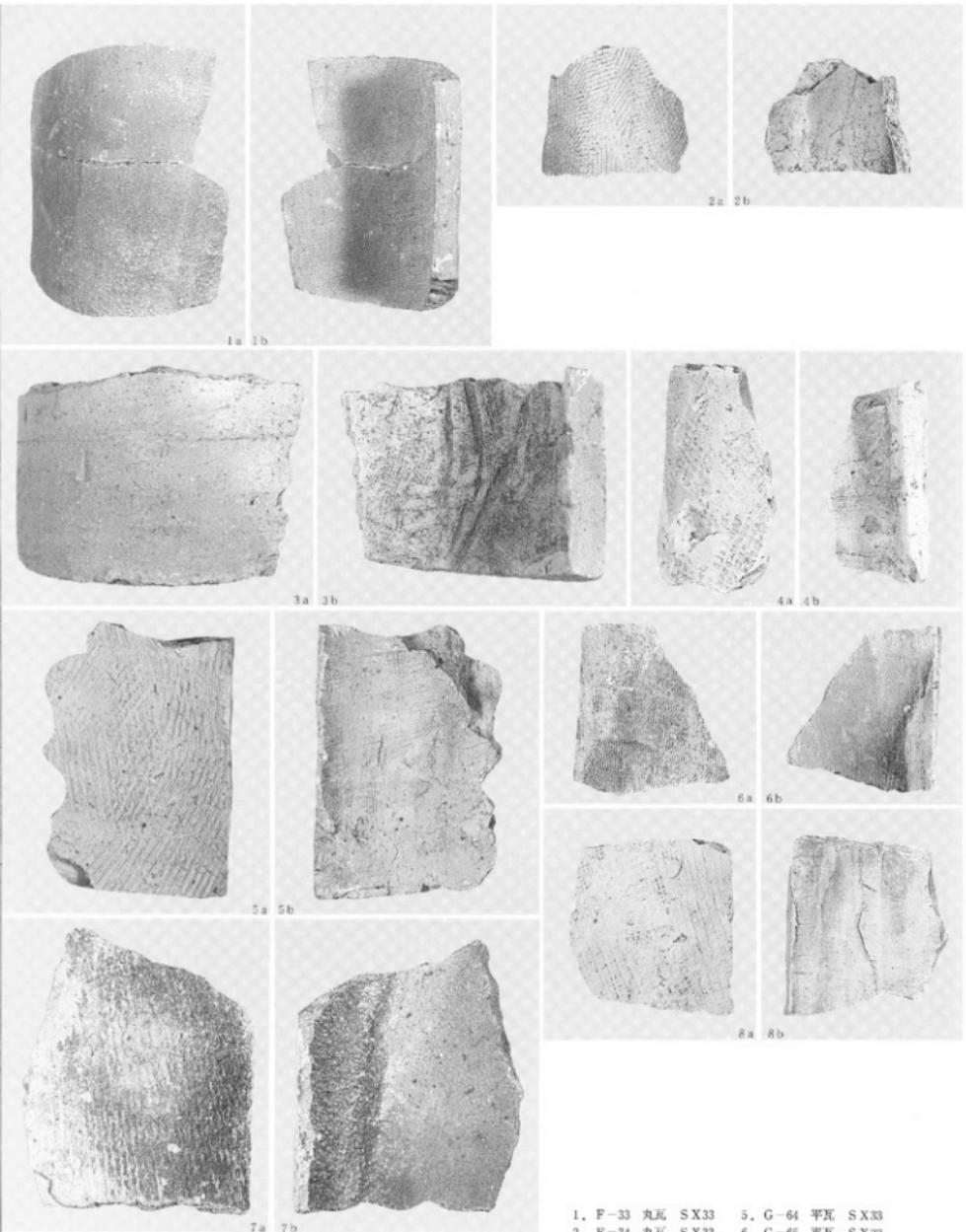
- | | | |
|----------------|-----------------|------------------|
| 1. D-79 环 SX33 | 9. D-88 环 SX33 | 17. D-97 环 SX33 |
| 2. D-80 环 SX33 | 10. D-89 环 SX33 | 18. D-98 环 SX33 |
| 3. D-81 环 SX33 | 11. D-90 环 SX33 | 19. D-99 环 SX33 |
| 4. D-82 环 SX33 | 12. D-92 环 SX33 | 20. D-100 环 SX33 |
| 5. D-83 环 SX33 | 13. D-93 环 SX33 | 21. D-106 环 SX33 |
| 6. D-84 环 SX33 | 14. D-94 环 SX33 | 22. D-118 环 SX33 |
| 7. D-86 环 SX33 | 15. D-95 环 SX33 | 23. D-126 环 SX33 |
| 8. D-87 环 SX33 | 16. D-96 环 SX33 | 24. D-127 环 SX33 |

图版11 出土遗物 (1)



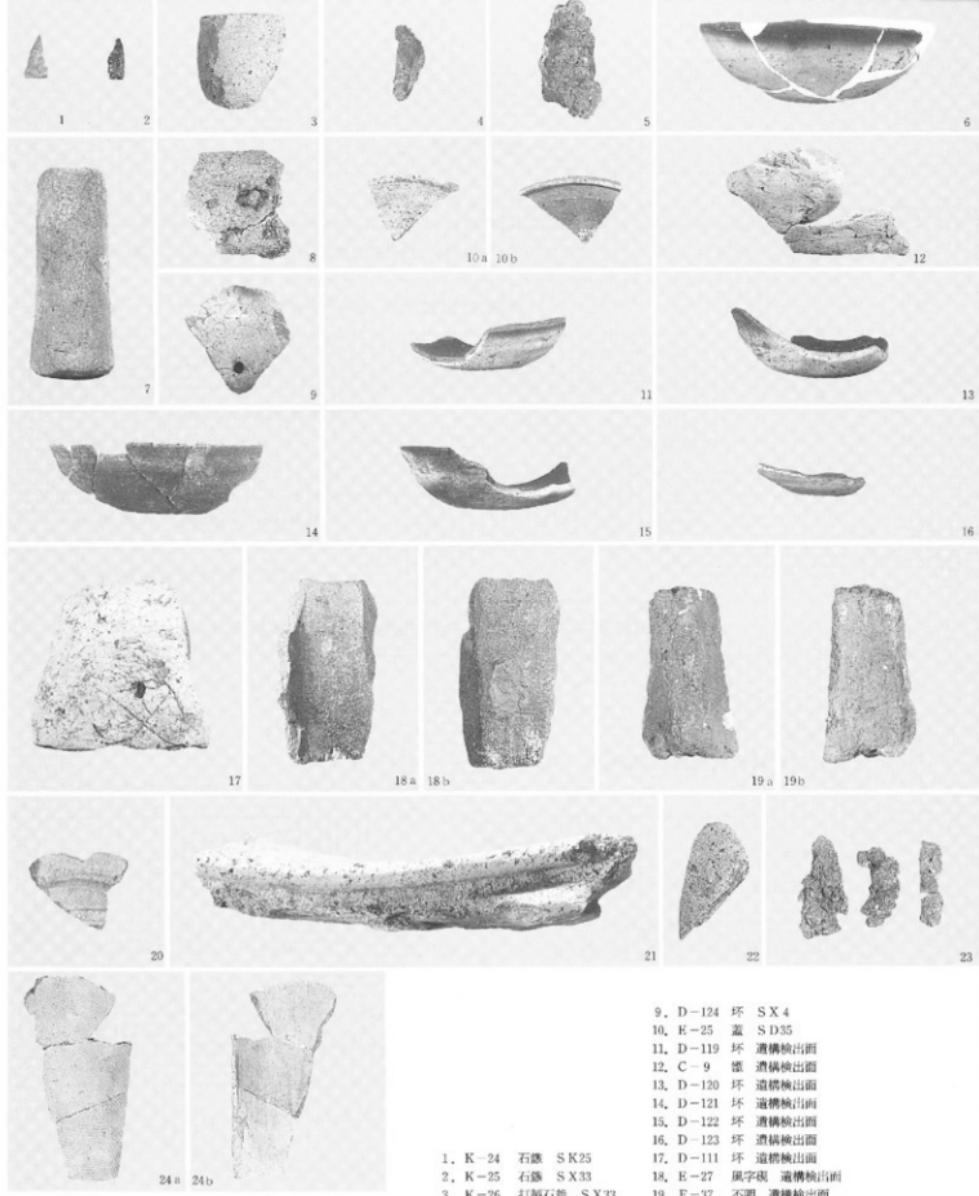
1. D-128 环 S X33 11. D-129 鞘 S X33
 2. D-101 小皿 S X33 12. E-26 壶 S X33
 3. D-102 小皿 S X33 13. D-91 环 S X33
 4. D-103 小皿 S X33 14. D-108 环 S X33
 5. D-104 小皿 S X33 15. D-109 环 S X33
 6. D-105 小皿 S X33 16. D-110 环 S X33
 7. D-116 环 S X33 17. D-112 环 S X33
 8. D-130 环 S X33 18. D-113 环 S X33
 9. D-125 环 S X33 19. D-114 环 S X33
 10. D-107 壶 S X33 20. D-115 环 S X33

図版12 出土遺物(2)



1. F-33 丸瓦 SX33 5. G-64 平瓦 SX33
 2. F-34 丸瓦 SX33 6. G-65 平瓦 SX33
 3. F-35 丸瓦 SX33 7. G-66 平瓦 SX33
 4. F-36 丸瓦 SX33 8. G-67 平瓦 SX33

圖版13 出土遺物 (3)



1. K-24 石鑿 SK25
 2. K-25 石鑿 SX33
 3. K-26 打製石斧 SX33
 4. N-11 鐵錠品 SX33
 5. N-12 鐵斧 SX33
 6. D-117 环 SK25
 7. P-4 カマF支脚 SX33
 8. P-3 フイゴ羽口 SX33
 9. D-124 环 SX4
 10. E-25 盖 SD35
 11. D-119 环 遺構檢出面
 12. C-9 錐 遺構檢出面
 13. D-120 环 遺構檢出面
 14. D-121 环 遺構檢出面
 15. D-122 环 遺構檢出面
 16. D-123 环 遺構檢出面
 17. D-111 环 遺構檢出面
 18. E-27 風字鉛 遺構檢出面
 19. F-37 不明 遺構檢出面
 20. F-38 軒丸瓦 遺構檢出面
 21. G-68 軒平瓦 遺構檢出面
 22. K-27 磨製石斧 表土
 23. N-10 鐵錠品 遺構檢出面
 24. G-69 平瓦 遺構檢出面

図版14 出土遺物(4)

報告書抄書

ふりがな	せん だい へい や いせき ぐん							
書名	仙台平野の遺跡群							
副書名	平成9年度発掘調査報告書 燕沢遺跡第11次調査							
卷次	XVII							
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第228集							
編著者名	長島栄一、豊村幸宏							
編集機関	仙台市教育委員会							
所在地	〒980 8671宮城県仙台市青葉区国分町三丁目7-1 TEL022-214-8893~8894							
発行年月日	1998年3月31日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所取遺跡名	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
燕沢遺跡	宮城県仙台市宮城野区 燕沢東三丁目	04100	38° 01001	141° 17' 10"	1997.10.13 ~1997.12.12	400m ²	重要遺跡 範囲確認	
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
燕沢遺跡	寺院跡 集落跡	平安	柱列・溝跡・堅穴住居跡 土坑・性格不明遺構	土師器・須恵器 赤焼き土器・繩文土器 瓦・石器・鉄滓				

仙台市文化財調査報告書第228集
仙台平野の遺跡群XVII

—平成9年度発掘調査報告書—
1998年3月

発行 仙台市教育委員会
仙台市青葉区国分町三丁目7-1
文化財課 022(214)8893
印刷 株式会社 東北プリント
仙台市青葉区立町24-24
TEL 263-1166
